



本
話

妙
竹

七

編

人

五
編

上

へ13
3121
5



特
へ13
3121
5

龍亭大人がハ笑夫人をハ人の速をあげ。
龍亭 夫人 笑夫人 速
 生るゝ和合人をも六人ハ笑を和を集ふ一滑
和合人 六人 笑 和 集 滑
 種々海落の妙とをさし人々を笑へし後の皮
海落 妙 人々 笑 後の皮
 とよららるゝあし。そのあそびの浦山ししき
あし 浦山
 八人との人ハ中々しり。七人の懶惰のの成引
八人 中々 七人 懶惰 成引



本^{ほん}七^{しち}偏^{へん}人^{にん}とら^ら名^なを^を付^つて^て放^{はな}て^て置^おく^く銭^{せん}
と^とて^てめ^めし^し寶^{ほう}集^{じつ}坐^ざ坐^ざを^を人^{にん}と^とあ^あら^らお^お先^{せん}美^み
膳^{ぜん}厚^{こう}面^{めん}皮^ひ一^{いつ}部^ぶの^の巾^{きん}と^とあ^あら^らし^し少^{せう}座^ざは^は肩^{かた}
と^と重^{おも}く^くす^すの^のふ^ふ笑^{わら}人^{にん}や^や和^わ合^が人^{にん}の^のお^おや^や金^{かね}は
中^{ちゆう}之^し尾^び不^ふ齊^{せい}と^と七^{しち}偏^{へん}人^{にん}嗚^な呼^こ我^{われ}お^おく^く押^お強^{つよ}
一^{いつ}坐^ざ坐^ざト^トさ^さら^ら座^ざが^が要^{よう}く^く少^{せう}の^の袋^{ふくろ}を^をる^ると^と持^も

元^{もと}の^の辭^{ことば}を^を力^{ちから}ふ^ふお^おつ^つる^るを^を怖^{おそ}り^り後^{あと}と^とあ^あら^らし^し何^{なに}
指^{さし}さ^さら^らる^るを^を身^み五^ご編^{へん}先^{せん}世^{せい}お^おく^く是^{これ}限^{かぎ}りの^の大^{おほ}
尾^び坐^ざ坐^ざト^ト漕^{そう}付^つけ^けの^の物^{もの}と^と大^{おほ}き^きな^な息^{いき}と^とい^いふ^ふ
う^うら^ら乾^かん^ん息^{いき}を^を冷^{ひや}や^やう^うふ^ふ額^{かぶ}の^の汗^{あせ}と^と拭^{ぬぐ}ふ^ふい^いら^ら
世^よ叙^{じゆ}出^でて^てさ^さら^らる^るの^の名^ない^いら^ら

和

和

東都

梅亭金鷲編次

○

青柳橋あをやなぎはしの能楽亭のうらくてい少相あひも髪かみらう茶目ちやめ去き虚きよ松まつ
 下へをゆゆる躍たぎ助すけ赤あかよりて主人あにをき流ながゆらをまるりじじ社しゃ濟さいきあ秋あき
 の日ひの雨あめささおおろろろろ出いて人ひとの心こころの淋しみししききよりよりももひひ付つるる白しろ
 物もの語ご小こ大だいをを驚おどししてて考からんらんののををとと既す小こああるる夕ゆふ陽ひかりののけけららが
 一いち番ばん二に毛もうんとんと頭かぶににちちやや怪あや談だんををけけししてて一いちととちち残のこるる燈あかり火び

と大悪が番不あがりける故大悪を海ねども流し掃ぎり
燈のおふすまうりて何やうんんとうりても執向に丹は困り
果するそのうちふみ人ののりこる竊にたをを指て行と
お知るび大悪は顔ていつのの癖「オホ」と嘆とする拍子小
忽地あうりと吹消せび「ッ」とふたきど詮方なくそのま
そ処ふ似を編め目むりむちくさやううと指て居ると
生憎ふきを寺の鐘りの凄く霜ふすまうはの舌さいと淋
し物不づやまび生と付ての臆病めとんくも味がつらうく

有り方一そ処らの溜のせうううまの首でも出やううと
ト忽地珍元よりぞうとすうやど忠怖らり手は流ゆそドめ五
人のもの元の癖に居ると必ひ大悪は顔不尻おとらうら
「五」森治郎大人「モ」森治郎大人何ぞう寂莫とて化りのま
いぢやア四せつやせんうとむど返辞をするあうけはせりあく
うそ効味あくるあり少一唇えまて尻でこ盛のまう首を
お一身とたむとぞうぞう「モ」茶め大人「エ」茶め大人とぞう
茶め大人と噂りひてえてまこ唇え「是」近ごろ大人おね

中飯と小柳のあひと天窓と笑と天窓の先で小柳ある
用神を引るるうー神の仲るるあやうの務と天窓うーあ
びるるあやうやうやう少く落付てイヤ次のうごととあつて
送出〜〜は処いす柳の仲と道理で声が可怪くひびく
开してこの務あはれ〜〜先打揚あて喰せ〜〜か
千揚りのと扱へ〜小夏の務あ〜ナ。チヤく天窓う〜えり
う〜五條ぢう〜務あ〜〜は〜と探りま〜〜あ〜〜も
は処へ扱扱して送る〜このう天のお助ま〜と小あめる隈家

〜〜中飯の仲〜〜あ〜と送入〜固く地を掃めり〜あ
び〜中の隔紙〜あ〜の息と〜と〜居〜り〜と〜あ〜あ〜あ
手と〜と〜扱〜と〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
手知ら〜と〜扱〜と〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
下〜と〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
冠り息と〜と〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
び〜の道具と〜と〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

ちまうくと極の板屋を歩行るぐう藤子の棧へ是とて掛
さらりと明て我女へ送入彼燭香を突いど大煮とを
清深き湯が居りあぐる鼻の先へ敷く棧に茶香を
つひお茶をいん茶茶とあアぐれととるぐう香とへり
生してえまこと此家主の源き湯の卒忽きぐ持まへ
まバ一向おぬが付をトヤヤお留守くととつてとと
お家にお在るぐう開くとお家でも未だア志まへ一燭香
イヤ燭香とと及ぶあつとつとい方も例の卒忽者向ふ

の玄端の身へ送入らぐ早く変化の姿をいせんと此据
そつてもちつとつ涌つてえてもぬが付を湯へお小煮
今秋とつこの外でもお他所へ惟一の茶番の世居
を情まれのぐう毛漉くもあさんお出番方とうける
けらもアおぬが付ととも構う茶同きぐぬりの先へ
顔つと出へおぬが付ととて大煮とつと牛の
鳴ま似とてるぐう天煮とつとへりくと香を吹る湯
まはひ懸るぬが付とて「キヤア」とととる両手を伸一生

とておと生躰小あてしつれを指めりし知らやア一柱
大なる声で呼ぶをりまうりトまうり茶をすし
ぬぐ付らうりトツ目入道一ツ日子傍木鬼を鬼外
道の化りの小秋忌神より赤合羽とまうりまあ
まうり虚只紅い勝より茶碗へあて汲あり
是ちく僉ぐす程不程頼るまうりひねを面へ吹りけ
りやア一柱不ぬぬの遠むトまうりまうり懸てんて怖
りあるがし後志まうり虚長ヤアくあやア源も清の家おけ

さんど家守さんど一ツ源も清の家王さんど一遠む
家守さんどソト一何程とて此処不飛とのまうり一太
の所代り不まてのまも知とね一ト次佐が後陣の方代り
小まごまうり小なア一何ふとも大強助とまうり出
とつたまうり何ふ付不るののイマ傍よは陣の川出に春
膏葉と仰切紙がむとまうりやアわらうり一とらうり
何れ日あを一マソトより一何れ田がテ柳不あまぞト
大端短とまうりしる候不戸柳の入口短と持まうり

一度に「キヤアツ」と腰を抜そのまゝを延へ平伏し大急由外
る三人うつり目小僧外道の變化まゝ木兎の化りのに
本らる敷をさうさうも用なく「キヤアツ」と顔例に人の老の
声不響き此方に必漏つ虚長松濤助へ何らく「云
あぐら」大根の例へ例へて「まゝ」喜免印本目在下太師
がまゝまゝの「延へ」尻修つまじと何やらうとめう「眼
まゝ」散眼と光らむとまゝに白く「松」まゝまゝ
虚長へ何どのウ不景死木眼付やうとを根な此振へ

法が好むへ「は」白き圓とりのを早く出と使せむの
り何と可笑まま似をまゝの「まゝ」まゝまゝお例まゝ
大急が足と思つを踏つ子「まゝ」まゝ何と種のはまゝと法と
うのむき眼へ「まゝ」一維り此処に傳へたるの「まゝ」まゝ
つて種まゝと「まゝ」まゝと此方の虚長松目「まゝ」まゝ
つて病ると二人の例へ「まゝ」まゝと大急が「まゝ」まゝ
を「まゝ」の「まゝ」まゝと「まゝ」まゝの「まゝ」まゝと
大急に「まゝ」まゝと「まゝ」まゝと「まゝ」まゝと「まゝ」まゝ

と押へてまきみ 一子何奴が手ひらるる成者やアガよ
りや連津のうちぢやアアアア 額と軟がニキぶらんとひ
あふ何処の邊を住てまきつてかゝ何んぬらぬらぬ
眼かゝ火が中アア 自己の眼も火が飛中アア 金
眼かゝ火が中アア 綱と結て眼火が中アア
天窓が版指う何のやうで西白のらやアア 眼火と
ひかありのの 版指の津のひやぶひと志でアア文字が遠つて
居りアア 二つるよまでも米を火で煮て拵るのどうも米

と火とて一ふまき。ゆひのひを甘らしていぢやアア
何さるな拵るよなれまへお付て喰ふか 味噌汁と
ひのりもどきお 何れも今の世はよくよく
まきやアガ 人の版指う 眼火をえんぞとやアア
まじ眼火と中アア だけの備律はあ。アア せし格子を
故と住らう 先松津の景勢と寝さうと拵る
樂其の格子の因へ徐と運入草履とものこを併し藤の先
と運とねが奥あへ何連津がまきとらひて居る客手に併て

り母へらねらふ事とさうさるがれど子裁より出し持巻
に肌ぬいす子の平へ懸てささる子木刀のさび持子のそ
う肉を現け赤いゆきふりて固く子裁で持巻しめ
腰まろくと胡麻竹の枝で根平とささる後三豆あへ
下長腰とささる腰のささる「サア」まのばなは四方のささる
裁とぞしとささる身とぞささるささるのささるのささる
らう母へ裁やせ世のいのちとぞ「二」三と三はささるのささる
持しと腰のささるのささるのささるのささるのささるのささる

天窓へらぬけつひ唾で眉毛とせゆりた濡せが赤八甲
まこと持巻とささるのささるのささるのささるのささるのささる
小ぬきとぞしゆりわらう干し房もぬへあぬアのね「ア」持
うらとん。ア、糸井たでうら跡梅の梅干と二十は又う折一
ど小にの類づれぬうへ「ア」サアとささるのささるのささるのささる
ど眉毛へ懸付とささるのささるのささるのささるのささるのささる
とささるのささるのささるのささるのささるのささるのささるのささる
てヨ「ア」サアとささるのささるのささるのささるのささるのささるのささる

仕方がね(あ)鼻でも塗付ておろう。(へ)何ふとものう一人助
犬のうあるといけとどるア(あ)ちめふ(あ)腰
の尻りがぬらつてつね(あ)うが(あ)程の所為(あ)る
る(あ)ね(あ)何(あ)の(あ)目(あ)を(あ)付(あ)や(あ)う(あ)大(あ)家(あ)へ(あ)結(あ)つ(あ)て(あ)守(あ)り(あ)袋(あ)を(あ)抱(あ)
て(あ)る(あ)う(あ)ら(あ)う(あ)門(あ)口(あ)の(あ)掃(あ)子(あ)へ(あ)首(あ)と(あ)つ(あ)れ(あ)と(あ)み(あ)中(あ)の(あ)袋(あ)子(あ)を(あ)抱(あ)て(あ)う(あ)
う(あ)が(あ)ま(あ)ま(あ)と(あ)枝(あ)と(あ)して(あ)あ(あ)ら(あ)り(あ)や(あ)う(あ)ら(あ)の(あ)や(あ)ア(あ)何(あ)ぞ(あ)目(あ)飛(あ)さん(あ)が
化(あ)の(あ)や(あ)う(あ)す(あ)を(あ)知(あ)つ(あ)て(あ)尻(あ)り(あ)か(あ)う(あ)先(あ)へ(あ)運(あ)入(あ)て(あ)着(あ)け(あ)う(あ)飛(あ)へ(あ)ん(あ)ど
う(あ)と(あ)り(あ)目(あ)と(あ)ア(あ)も(あ)あ(あ)ら(あ)り(あ)中(あ)へ(あ)い(あ)き(あ)て(あ)此(あ)処(あ)へ(あ)寄(あ)り(あ)て(あ)尻(あ)り(あ)掃(あ)り

ので(あ)あ(あ)の(あ)い(あ)な(あ)や(あ)り(あ)何(あ)れ(あ)か(あ)ん(あ)ぐ(あ)て(あ)目(あ)飛(あ)子(あ)や(あ)程(あ)より(あ)や(あ)ま
の(あ)斑(あ)犬(あ)の(あ)方(あ)が(あ)強(あ)い(あ)や(あ)う(あ)ぞ(あ)の(あ)う(あ)飛(あ)へ(あ)た(あ)ね(あ)ら(あ)ぬ(あ)け(あ)ま(あ)ど(あ)万(あ)一(あ)斑(あ)犬
より(あ)つ(あ)ま(あ)の(あ)が(あ)む(あ)め(あ)と(あ)も(あ)れ(あ)ね(あ)へ(あ)チ(あ)ヨ(あ)ウ(あ)何(あ)れ(あ)か(あ)ん(あ)ぐ(あ)て(あ)り(あ)や(あ)
く(あ)兵(あ)人(あ)な(あ)さん(あ)ら(あ)ぬ(あ)小(あ)ぶ(あ)て(あ)り(あ)ね(あ)へ(あ)あ(あ)の(あ)目(あ)飛(あ)か(あ)う(あ)腰(あ)の(あ)所(あ)が
ひ(あ)ま(あ)と(あ)ら(あ)い(あ)ま(あ)を(あ)ぢ(あ)や(あ)ね(あ)ら(あ)う(あ)へ(あ)自(あ)色(あ)な(あ)る(あ)衣(あ)者(あ)か(あ)ら(あ)う(あ)の(あ)め
ど(あ)ア(あ)飛(あ)へ(あ)ら(あ)く(あ)家(あ)の中(あ)へ(あ)何(あ)う(あ)音(あ)が(あ)す(あ)る(あ)や(あ)う(あ)ぞ(あ)飛(あ)へ(あ)何(あ)れ(あ)か(あ)ん(あ)ぐ(あ)て(あ)り(あ)
小(あ)大(あ)急(あ)て(あ)目(あ)飛(あ)子(あ)と(あ)騙(あ)と(あ)先(あ)へ(あ)れ(あ)て(あ)運(あ)入(あ)て(あ)着(あ)け(あ)ま(あ)ど(あ)万(あ)一(あ)斑(あ)犬
ト(あ)二(あ)人(あ)の(あ)掃(あ)子(あ)の(あ)例(あ)へ(あ)ら(あ)う(あ)り(あ)亦(あ)逃(あ)出(あ)り(あ)り(あ)き(あ)き(あ)き(あ)き(あ)と(あ)洋(あ)裁

為付 一 ありともいふ海流をさるのめぢやアおろす
自じア 素正所流一とまどう一 藤もよくとて
あつとも止りやう志お一 二人が物の名も
餘り甘く化さるのそ大女さん目眩とておて仕舞とア
まどう一 下あさん小りやへ性て苦みといささうでお
意不天家成。コッキリ 抑られよと老飛が飛さう一 画者で
目眩とつをさう一 飛らさん飛さん肉心一 走性て
まて呉んおる 一 飛お小ま白小飛て何とて飛さるの
大魚先生なるのう 一 さうさく 一 何れとも知んて仕まる
ちやうた飛さう一 早くりやと時と来さう 一 古報とて
男のめアおむと 一 飛さん一 飛さん一 飛さん 一 大魚
心とちやア性おせ 一 飛さん一 飛さん一 飛さん 一 飛さん
飛さん一 飛さん一 飛さん一 飛さん一 飛さん 一 飛さん
女小惚られと飛ひ一 飛さん一 飛さん一 飛さん 一 飛さん
おあが年坊で自じが影違ふと 一 飛さん一 飛さん一 飛さん
とむとて飛さる 一 飛さん一 飛さん一 飛さん 一 飛さん

大魚先生なるのう 一 さうさく 一 何れとも知んて仕まる
ちやうた飛さう一 早くりやと時と来さう 一 古報とて
男のめアおむと 一 飛さん一 飛さん一 飛さん 一 大魚
心とちやア性おせ 一 飛さん一 飛さん一 飛さん 一 飛さん
飛さん一 飛さん一 飛さん一 飛さん一 飛さん 一 飛さん
女小惚られと飛ひ一 飛さん一 飛さん一 飛さん 一 飛さん
おあが年坊で自じが影違ふと 一 飛さん一 飛さん一 飛さん
とむとて飛さる 一 飛さん一 飛さん一 飛さん 一 飛さん

毒へ出りて一りを飲めぬは痛處をのりて分る方へ送入
まぐへ傳りて遠くまで今までもゆが付たふれは化
の指とてとて素人ふれて仕舞想し南を北にその
やうふれを遠くまでゆが付て付とつてをといわぬは
ふれは思ふ程想いするゆへに下太さんのやうふれを
打らねるゆへに思ふふれはとて化の付たゆへに
ゆへにゆへにと仕舞がむねはと付と通りの好男子ふれ
仕舞を思ふへた思ふ人むねのゆへに思ふゆへに思ふ

毒へ出りて一りを飲めぬは痛處をのりて分る方へ送入
まぐへ傳りて遠くまで今までもゆが付たふれは化
の指とてとて素人ふれて仕舞想し南を北にその
やうふれを遠くまでゆが付て付とつてをといわぬは
ふれは思ふ程想いするゆへに下太さんのやうふれを
打らねるゆへに思ふふれはとて化の付たゆへに
ゆへにゆへにと仕舞がむねはと付と通りの好男子ふれ
仕舞を思ふへた思ふ人むねのゆへに思ふゆへに思ふ

ぢやねう （虚ろ） 三麻 （た） るま （り） の目 （め） を ま （ま） と （と） 人 （ひと） の （の） 志 （し） の （の） 不 （ふ） 在 （ざい） や
ま （ま） と （と） 頼 （たの） ん （ん） 七 （しち） 何 （なに） 指 （さし） る （る） の （の） 目 （め） へ （へ） ま （ま） と （と） 大 （だい） 志 （し） 先 （せん） 生 （せい） 目 （め） と （と） 出 （で） ん
だ （だ） ぞ （ぞ） う （う） の （の） や （や） と （と） 呼 （よ） ぶ （ぶ） ま （ま） の （の） 人 （ひと） の （の） 目 （め） へ （へ） 自 （おの） 己 （の） 不 （ふ） 在 （ざい） と （と） 逃 （に） げ （げ） する （る） の
く （く） し （し） 出 （で） ん （ん） へ （へ） 自 （おの） 己 （の） 目 （め） へ （へ） 余 （あま） の （の） 手 （て） 出 （で） づ （づ） 宜 （よ） 敷 （敷） する （る） と （と） 出 （で） ん （ん） へ （へ） 出 （で） ん （ん）
お （お） け （け） の （の） ね （ね） へ （へ） 表 （ひ） 次 （じ） さん （さん） の （の） 方 （かた） と （と） ぞ （ぞ） う （う） へ （へ） 下 （か） 敷 （敷） 向 （む） 左 （さ） の （の） 推 （お） せ
察 （さ） して （し） 舟 （ふね） と （と） 石 （いし） や （や） さん （さん） だ （だ） の （の） 目 （め） へ （へ） 二 （に） 寸 （すん） 脈 （みやく） と （と） え （え） て （て） の （の） 目 （め） が （が） ち
ぢ （ぢ） や （や） ね （ね） う （う） へ （へ） 虚 （うつろ） へ （へ） 目 （め） を （を） 入 （い） ん （ん） 毛 （もう） の （の） 目 （め） へ （へ） 石 （いし） を （を） 入 （い） ん （ん） 目 （め） が （が） ち
私 （わが） ち （ち） や （や） 帰 （か） り （り） や （や） す （す） ぞ （ぞ） 使 （つか） ひ （ひ） の

若 （わ） の （の） 目 （め） へ （へ） 遠 （と） へ （へ） 目 （め） の （の） 毒 （どく） の （の） 目 （め） へ （へ） 攻 （こう） り （り） や （や） と （と） 考 （こう） り （り） 方 （かた） へ （へ） 勇
が （が） 佛 （ぶつ） 不 （ふ） 切 （き） と （と） 考 （こう） り （り） する （る） 手 （て） 出 （で） ん （ん） や （や） お （お） 慮 （りょ） み （み） や （や） ん （ん） へ （へ） 三 （さん） 麻 （ま）
三 （さん） 麻 （ま） の （の） 程 （ほど） 度 （ど） と （と） 様 （よう） 抄 （しやう） の （の） 目 （め） へ （へ） 性 （じやう） 大 （だい） 志 （し） 先 （せん） 生 （せい） 目 （め） へ （へ） 出 （で） ん （ん）
目 （め） へ （へ） 考 （こう） り （り） する （る） 手 （て） 出 （で） ん （ん） へ （へ） 腹 （はら） 念 （ねん） 不 （ふ） 抽 （しゆ） 強 （きやう） せ （せ） て （て） ん （ん） と （と） 必 （ひ） ず （ず） 候
み （み） へ （へ） 飛 （と） り （り） じ （じ） 医 （い） 者 （しや） と （と） 石 （いし） 屋 （いやく） の （の） 目 （め） へ （へ） 遠 （と） へ （へ） 目 （め） へ （へ） 不 （ふ） 可 （か） 笑
は （は） 成 （じやう） め （め） と （と） 耐 （たい） へ （へ） ば （ば） 時 （とき） 不 （ふ） ち （ち） 辛 （しん） 抱 （ぼう） ぐ （ぐ） 出 （で） 来 （らい） る （る） の （の） 目 （め） へ （へ） 考 （こう） り （り）
と （と） 吹 （ふ） 出 （で） せ （せ） 一 （いつ） 回 （かい） へ （へ） 目 （め） へ （へ） 考 （こう） り （り） する （る） 手 （て） 出 （で） ん （ん） へ （へ） 必 （ひ） ず （ず） 候
先生 （せんせい） の （の） 目 （め） へ （へ） 考 （こう） り （り） する （る） 手 （て） 出 （で） ん （ん） へ （へ） 虚 （うつろ） へ （へ） 目 （め） へ （へ） 考 （こう） り （り） する （る） 手 （て） 出 （で） ん （ん） へ （へ） 必 （ひ） ず （ず） 候

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a family or a specific institution. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.

Handwritten text in a cursive script, similar to the one on the opposite page. This page also contains several lines of text, which seem to be a continuation of the same document or a related one. The handwriting is consistent with the previous page, suggesting a single scribe or a specific regional style. The text is arranged in a vertical column, typical of traditional East Asian writing.

んを陸地をこもやア。こ星とけ入らア一候えな頼人の
る皆ふ成て自己も乳の付やうが避いけとてい新よ成
てはしぐもふ人の親よ成を割の悪いあいの結へ交
に女ふ成までい死うけ女親の丹精がた髪をまぶら
腹へあつとらうすも病人よ成てままの又月うん候の
まも毒ぞて是も毒ぞて甘いあいの世も冷とて比
ふのが有ても何ううとてえもせとて荒く候ゆ
をを解とまじつて物ぶとた髪ごのふまひのまじらふ

ひらうらうそそ処へ赴かると様ふはるまじ比おの
椅まで眠つて湯のやうな粥で命をはる死あうらう
途と赤子の世話枕車い海のものもまぶ負いかへて
産と働き出用のうちの異い日も乳よ甘よて乳付れ
おの肩まひも容易よ出来までおの障夜のまじサ小も
小はよ養小記まきて温まるるも泣くてらまじやうと編
して電らくぬへ胎毒抱瘵小疾ももよう母親に
世話がゆまふた病人祇應の勞れのいひもなく夜の

